

# 病害虫発生予察情報(12月予報)

令和6年11月27日

静岡県病害虫防除所長

## 1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (12月の県平均平年値)	予報の根拠
温州みかん	青かび・緑かび病	発生量：多	11月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ミカンハダニ	発生量：並	11月中旬発生量：並 (±) ただし、一部ほ場で多 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
トマト	葉かび病・ すすかび病	発生量：やや少 (発病株率12.1%)	11月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	灰色かび病	発生量：やや少 (発病株率2.8%)	11月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	黄化葉巻病	発生量：並 (発病株率2.5%)	11月中旬発生量：少 (－) コナジラミ類発生量：多 (＋) 防除員からの報告：やや多 (＋) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±)
	コナジラミ類	発生量：多 (寄生株率13.2%)	11月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±)
	ハスモンヨトウ	発生量：やや多 (寄生株率0.03%)	11月中旬発生量：やや多 (＋) フェロントラップ誘殺数：多 (＋) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±)
だいこん	黒斑細菌病	発生量：やや多 (発病株率3.5%)	11月中旬発生量：やや多 (＋) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	白さび病	発生量：少 (発病株率2.5%)	11月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	モザイク病 (アブラムシ類)	モザイク病発生量：少 (発病株率1.7%) アブラムシ類発生量：少 (寄生株率3.8%)	11月中旬発生量 モザイク病：少(発生なし) (－) アブラムシ類：少 (－) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	コナガ	発生量：少 (寄生株率0.7%)	11月中旬発生量：少(発生なし) (－) フェロントラップ誘殺数： 並～やや多(±～＋) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ナモグリバエ	発生量：少 (寄生株率7.0%)	11月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)

作物名	病害虫名	予報 (12月の県平均平年値)	予報の根拠
キャベツ	黒腐病	発生量：少 (発病株率3.6%)	11月中旬発生量：少 (一) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	菌核病	発生量：並 (発病株率0.4%)	11月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	コナガ	発生量：少 (寄生株率0.2%)	11月中旬発生量：少(発生なし) (一) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	オオタバコガ	発生量：少 (寄生株率0%)	11月中旬発生量：少(発生なし) (一) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	タマナギンウワバ	発生量：並 (寄生株率0.4%)	11月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	アブラムシ類	発生量：少 (寄生株率0.7%)	11月中旬発生量：少(発生なし) (一) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
たまねぎ	腐敗病	発生量：多 (発病株率0.6%)	11月中旬発生量：多 (十) 防除員からの報告：多 (十) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ネギアザミウマ	発生量：少 (寄生株率27.6%)	11月中旬発生量：少 (一) 被害度：低い (一) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
ねぎ (白ねぎ)	さび病	発生量：少 (発病株率3.4%)	11月中旬発生量：少(発生なし) (一) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	黒斑病・葉枯病	発生量：少 (発病株率1.8%)	11月中旬発生量：少 (一) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ネギアザミウマ	発生量：少 (寄生株率9.0%)	11月中旬発生量：少 (一) 被害度：並 (±) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ネギハモグリバエ	発生量：少 (寄生株率1.5%)	11月中旬発生量：少 (一) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)

作物名	病害虫名	予報 (12月の県平均平年値)	予報の根拠
レタス (非結球 レタス を除く)	斑点細菌病	発生量：少 (発病株率 0.7%)	11月中下旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	べと病	発生量：並 (発病株率 0.9%)	11月中下旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
いちご	うどんこ病	発生量：少 (発病株率 1.4%)	11月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±)
	炭疽病	発生量：多 (発病株率 1.2%)	11月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±)
	アブラムシ類	発生量：少 (寄生株率 2.8%)	11月中旬発生量：少 (－) ただし、一部ほ場で多 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±)
	ハダニ類	発生量：やや少 (寄生株率 18.6%)	11月中旬発生量：やや少 (－) ただし、一部ほ場で多 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±)
	アザミウマ類	発生量：多 (寄生株率 2.6%)	11月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±)
	ハスモンヨトウ	発生量：多 (寄生株率 0.1%)	11月中旬発生量：多 (＋) フェロモントラップ誘殺数：多 (＋) 防除員からの報告：やや多～多 (＋) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±)

#### 表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1か月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(＋)、少発要因の場合は(－)を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報は  
こちらで  
検索！



静岡県農薬安全使用指針  
・ 農作物病害虫防除基準  
<https://www.s-boujo.jp/>

静岡県病害虫防除所 HP  
が新しくなりました。



静岡県病害虫防除所 HP  
<https://www.pref.shizuoka.jp/sangyo/shigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>

## 2 予報の根拠と防除対策

### 【温州みかん】

#### <生育の概況>

県果樹研究センター及び県伊豆農業研究センターによると、青島温州において果実肥大は平年並～やや悪く、着色は平年よりやや早い。

#### ●青かび・緑かび病

##### 予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均樹上発病果数は3.7個/樹（平年0.7個/樹）、落果発病果数は16.0個/樹（平年4.7個/樹）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

##### 防除対策

- ・ 樹上発病果や発病した摘果果実は、園内の菌密度を高めるため、園外に持ち出して処分する。
- ・ 防除を行う場合は、収穫前日数に注意して薬剤を選択する。
- ・ 本病は果実表面の傷から病原菌が侵入するため、果実に傷がつかないように注意して収穫作業を行う。
- ・ 果実が過熟にならないよう適期に収穫し、雨の日や雨の翌日など果実に水滴が残っているようなときには収穫を避ける。
- ・ 収穫後は入庫時の予措を徹底するとともに、貯蔵中は点検を行い発病果の除去をする。

#### ●ミカンハダニ

##### 予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は2.1%（平年2.2%）と平年並だったが、一部ほ場では多発していた。
- ・ 1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

##### 防除対策

- ・ 発生が多い園地では、収穫前日数に注意して薬剤防除を行う。
- ・ 剪定後、越冬虫を対象にマシン油乳剤を散布する。ただし、寒害を受けやすい園地では3月に散布する。

### 【かんきつ全般】

#### <その他の病害虫>

#### ●黒点病

- ・ 近年、本県では多発傾向にある。樹冠内部の枯れ枝や園の内外に放置された剪定枝、切株などで本病の胞子が作られ伝染源となる。このため、整枝、剪定を適正に行い、樹冠内部の採光、通風を良好な状態に保つ。また伝染源となる枯枝の剪定と剪定枝の処分を行い、耕種的防除を適切に実施する。

#### ●かいよう病

- ・ 本病の越冬病斑は重要な伝染源となるため、園内からの除去を徹底する。発生園では冬期に発病枝葉の切除、防風垣・防風ネットの整備を徹底し、翌春の新梢への感染拡大を防ぐ。

#### ●カイガラムシ類

- ・ 剪定後、越冬虫を対象にマシン油乳剤を散布する。ただし、寒害を受けやすい園地では3月に散布する。

## 【トマト】

### ＜生育の概況＞

生育はやや遅い～やや早い傾向。

### ●葉かび病・すすかび病

#### 予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は2.5%（平年10.3%）と平年より少なかった。ただし病害虫防除員からは、一部地域で平年よりやや多いとの報告があった。
- ・ 1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本病の発生を助長しないが、例年12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病26～28℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

#### 防除対策

- ・ 葉かび病については、葉かび病抵抗性品種（Cf-9）を侵すレース2.9の発生が県内で確認されている。本県では12月以降は葉かび病の発生が増加する傾向があるため、葉かび病抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、葉かび病の発生に注意する。
- ・ 本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、作用性の異なる薬剤をローテーション散布する。
- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に撤去し、適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。

### ●灰色かび病

#### 予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、本病の発生は認められなかった（平年平均発病株率0.9%）。ただし病害虫防除員からは、一部地域で平年よりやや多いとの報告があった。
- ・ 1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しないが、例年、12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

#### 防除対策

- ・ 株の繁茂、ハウス内湿度の上昇、株の結露により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、作用性の異なる薬剤をローテーション散布する。
- ・ 発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ほ場外に撤去し、適切に処分する。
- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。

## ●黄化葉巻病

### 予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.5%（平年1.4%）と平年より少なかった。
- ・病害虫防除員からは、4名中2名から本病の発生が「やや多い」との報告があった。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本病を媒介するタバココナジラミの増殖を助長しないが、コナジラミ類の平均寄生株率が平年より高いため、本病の発生は助長される。

### 防除対策

- ・本病はタバココナジラミによって媒介されるため、タバココナジラミの防除を徹底する。防除対策については、コナジラミ類の項を参照すること。
- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・多発ほ場においては、耐病性品種の利用を検討する。なお、耐病性品種でも感染し、ウイルス密度が高まると発病するため、タバココナジラミの防除を徹底すること。

## ●コナジラミ類

### 予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は16.8%（平年13.3%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を助長しない。

### 防除対策

- ・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
- ・成虫の寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が確認された場合は薬剤防除を実施する。

## ●ハスモンヨトウ

### 予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.7%（平年0.1%）と平年よりやや多かった。
- ・フェロモントラップ調査における10月21日～11月20日の合計誘殺数は、3地点（静岡市、磐田市および御前崎市）すべてで平年より多く推移している。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を助長しない。

### 防除対策

- ・気温の低下に伴い施設内への成虫の侵入は少なくなるが、発生を認めた場合は若齢幼虫のうちに防除する。
- ・発生状況及び防除対策については、[「技術情報第3号（作物全般 ハスモンヨトウ）」](#)も参照する。

## 【だいこん】

### ＜生育の概況＞

生育は平年並～やや早い。

### ●黒斑細菌病

#### 予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は1.1%（平年0.4%）と平年よりやや多かった。
- ・ 1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない（本病の発病適温は25～30℃、降雨は本病の発生を助長する）。

#### 防除対策

- ・ 生育の衰えは本病の発生を助長するため、肥料切れと排水に注意し、適切な管理に努める。
- ・ 病原細菌は、強風雨等による傷口から侵入するので、強風雨の前か直後に防除を行う。
- ・ 降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ 特に、葉柄基部から侵入した場合は根部に影響を与え、商品価値を落とすこともあるため注意する。

### ●白さび病

#### 予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、本病の発生は認められなかった（平年発病株率0.1%）。
- ・ 1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない（本病は多湿を好み、分生子の発芽最適温度は10℃程度である）。

#### 防除対策

- ・ 白さび病が多発するとワッカ症を併発することがあるため、は種時期の遅い作型では、葉での発病が少ないうちに予防散布を行うことが必要である（予防散布の防除適期は間引き後7～30日）。
- ・ 発病残渣は翌年の伝染源となるため、ほ場外に撤去し、適切に処分する。
- ・ 排水を良好にするなどして多湿にならないように努める。

### ●モザイク病（アブラムシ類）

#### 予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、モザイク病の発生は認められなかった（平年発病株率0.4%）。
- ・ 本病の媒介虫であるアブラムシ類の平均寄生株率は0.2%（平年0.9%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、アブラムシ類の発生を助長しない。このため、本病の発生も助長されない。

#### 防除対策

- ・ 雨が降らない日が続くとアブラムシ類が急増する場合があるので、ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。
- ・ 被害株も伝染源となるため、速やかに抜き取り、ほ場外で適切に処分する。

## ●コナガ

### 予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率0.2%）。
- ・フェロモントラップによる本種の誘殺状況は、牧之原市で平年並に、浜松市で平年よりやや多く推移している。
- ・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

### 防除対策

- ・ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。

## ●ナモグリバエ

### 予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率3.7%）。
- ・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

### 防除対策

- ・葉表の白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕が多数見られる場合は、薬剤防除を実施する。

## <その他の病害虫>

### ●ヨトウムシ類

- ・11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は6.4%（平年0.3%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、降水量・気温ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。
- ・気温の低下とともに幼虫の発生は減少するが、本年はフェロモントラップへの成虫誘殺数が平年に比べ多いため、幼虫の発生が認められたら早めに防除する。

## 【キャベツ】

### <生育の概況>

生育は平年並～遅れている。

### ●黒腐病

#### 予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.2%（平年1.9%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並であるため、本病の発生を特には助長しない。

#### 防除対策

- ・本病は、例年12月まで発生が見られるため、強風雨の前後に薬剤散布を行い、予防や感染の拡大防止に努める。
- ・被害残さは感染源となるため、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。

### ●菌核病

#### 予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.2%（平年0.2%）と平年並だった。
- ・本病は気温20℃前後で雨の多い年に発生が多い。1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並であるため、本病の発生を特には助長しない。



## 防除対策

- ・本病は例年 12 月まで発生が見られるため、薬剤の予防散布や被害の拡大防止に努める。
- ・被害残さは感染源となるため、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。

## ●コナガ

### 予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率 0.1%）。
- ・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

### 防除対策

- ・発生を確認したら早めに防除を行う。幼虫は葉裏に生息するので、薬剤が葉裏にかかるように散布する。

## ●オオタバコガ

### 予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率 0.2%）。
- ・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

### 防除対策

- ・結球内部に入ってしまうと薬剤が届かないため、発生が見られたら早めに防除を行う。

## ●タマナギンウワバ

### 予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率 0.4%（平年 0.5%）と平年並だった。
- ・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

### 防除対策

- ・幼虫の発育が進むと食害量が多くなるため、発生が見られたら早めに防除を行う。幼虫は葉裏を加害するため、防除の際は葉裏にも薬液が十分かかるように散布する。

## ●アブラムシ類

### 予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率 0.7%）。
- ・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

### 防除対策

- ・本種は風通しの悪い場所に多く発生することから、例年発生が認められるほ場では発生に注意し、早めに防除を行う。

## <その他の病害虫>

### ●ハスモンヨトウ

- ・11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率が 1.0%（平年 0.02%）と平年よりも多かった。本種は気温の低下とともに幼虫の発生は減少するが、本年はフェロモントラップへの成虫誘殺数が平年に比べ多いため、幼虫の発生が認められたら早めに防除する。

## 【たまねぎ】

### <生育の概況>

生育は、平年に比べ遅れている。

### ●腐敗病

#### 予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均発病株率は19.2%（平年0.1%）と平年より多かった。
- ・ 病害虫防除員から本病の発生が平年より多いとの報告があった。
- ・ 1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並であるため、本病の発生も平年と同様に増加すると考えられる。

#### 防除対策

- ・ 本病は細菌病であり、強風雨等による傷口から侵入するため、強風雨の前後に薬剤散布を行い、予防や感染の拡大防止に努める。
- ・ ネギアザミウマの食害も本病の感染を助長するため、発生に注意し、本種の防除を実施する。
- ・ 発病株は感染源となるため、速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
- ・ 防除対策については「[技術情報第4号（たまねぎ 腐敗病）](#)」も参照すること。

### ●ネギアザミウマ

#### 予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.2%（平年19.7%）と平年より少なかった。被害程度を示す被害度は0.4（平年10.0）と平年よりも低かった。
- ・ 1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

#### 防除対策

- ・ 12月に入り気温が下がると、本種の活動が抑制され被害が目立たなくなるが、暖冬の年は冬期も増殖して被害を及ぼす恐れがあるため発生に注意する。成幼虫が葉の付け根等に集合、寄生しているため、発生状況を確認して防除を行う。

### <その他の病害虫>

### ●シロイテモジトウ

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率が0.6%（平年0.4%）と平年よりもやや多かった。本種は気温の低下とともに幼虫の発生は減少するが、本年はフェロモントラップへの成虫誘殺数が平年に比べ多いため、幼虫の発生が認められたら早めに防除する。

## 【ねぎ（白ねぎ）】

### <生育の概況>

生育は平年より遅くなっている。

### ●さび病

#### 予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率1.3%）。
- ・ 1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並であるため、本病の発生を特には助長しないが、例年12月は発生が増加するため注意する（本病の発病適温は10～22℃、降雨は本病の発生を助長する）。

## 防除対策

- ・肥料の過不足は発病を助長するので、施肥を適正に行う。
- ・薬剤防除は予防散布や発生初期の散布が効果的である。殺菌剤を連用する場合は、系統の異なる剤を選択し、散布する。

## ●黒斑病・葉枯病

### 予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、平均発病株率1.4%（平成3.3%）と平成より少なかった。
- ・黒斑病の分生子発芽・形成適温は24～27℃で、降雨が多いと発生が増加する。また、葉枯病の多発気温は15～20℃である。1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平成並であるため、本病の発生を特には助長しない。

### 防除対策

- ・肥料切れで草勢が低下すると発病しやすくなるので、適切に施肥を行う。
- ・薬剤散布は予防散布や発病初期の散布が効果的である。殺菌剤を連用する場合は、系統の異なる剤を選択し、散布する。

## ●ネギアザミウマ

### 予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は8.2%（平成12.8%）と平成より少なかった。被害程度を示す被害度は15.6（平成14.8）と平成並だった。
- ・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平成並のため、本種の発生を特には助長しない。

### 防除対策

- ・12月に入り気温が下がると本種の活動が抑制され被害が目立たなくなるが、暖冬の年は冬期も増殖して被害を及ぼす恐れがあるため発生に注意する。成幼虫が葉の付け根等に集合、寄生しているため、発生状況を確認して防除を行う。

## ●ネギハモグリバエ

### 予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は7.8%（平成23.5%）と平成より少なかった。
- ・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平成並のため、本種の発生を特には助長しない。

### 防除対策

- ・今後は気温の低下に伴い発生は減少するが、発生の見られる場合は早めに防除する。
- ・本種は蛹が土壌中で越冬するため、多発生した場合は、次作の定植前に土壌消毒を実施すると防除効果が高い。

## <その他の病害虫>

### ●シロイチモジヨトウ、ハスモンヨトウ

- ・11月中旬の巡回調査では、シロイチモジヨトウの平均寄生株率が1.8%（平成0.2%）、ハスモンヨトウの平均寄生株率が0.6%（同0.04%）とどちらも平成より多かった。両種は気温の低下とともに幼虫の発生は減少するが、本年はフェロモントラップへの成虫誘殺数が平成に比べ多いため、幼虫の発生が認められたら早めに防除する。

## 【レタス（非結球レタスを除く）】

### <生育の概況>

生育は平年よりやや早い。

### ●斑点細菌病

#### 予報の根拠

- ・ 11月中下旬の巡回調査では、本病の発生は認められなかった（平年発病株率0.1%）。
- ・ 1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない（本病は比較的低温で多湿条件を好むため、トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなる）。

#### 防除対策

- ・ 発病は主に結球期以降であるが、結球前に薬剤の予防散布をして葉面の病原細菌密度を下げる 것이重要である。
- ・ 降雨が続くときや初発を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

### ●べと病

#### 予報の根拠

- ・ 11月中下旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は0.4%（平年0.2%）とほぼ平年並だった。
- ・ 1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない（本病は生育適温10~15℃であり、多湿条件を好むため、トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなる）。

#### 防除対策

- ・ 初発を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ 罹病残さは、ほ場外に処分する。
- ・ トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

### <その他の病害虫>

### ●ビッグベイン病

- ・ 11月中下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率0.1%）。
- ・ 本病は土壤中に生息する菌によって媒介される土壤伝染性のウイルス病である。そのため、発病株の見られるほ場の土を、靴や農機具などにつけて他のほ場に持ち運ばないように注意する。

### ●ハスモンヨトウ

- ・ 11月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.3%（平年0.1%）と平年より多かった。
- ・ フェロモントラップ調査における10月21日~11月20日の合計誘殺数は、3地点（静岡市、磐田市および御前崎市）すべてで平年より多く推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量、気温ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。
- ・ 本種は気温の低下とともに幼虫の発生は減少するが、本年はフェロモントラップへの成虫誘殺数が平年に比べ多いため、幼虫の発生が認められたら早めに防除する。

## 【いちご】

### <生育の概況>

花芽の生育は平年より遅れている地域が多い。

### ●うどんこ病

#### 予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 1.2%）。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

#### 防除対策

- ・ 胞子の発芽適温は 20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため予防に努める。
- ・ 多発生すると防除が困難になりやすいため、発病が少しでも見られた場合は早急に防除する。12月以降は果実への発生も多くなるため、発病果の早期発見と除去を徹底する。

### ●炭疽病

#### 予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均発病株率は 2.7%（平年 1.4%）と平年より多かった。
- ・ 地域別の発病株率は、東部地域では 0.6%（平年 1.9%）、中部地域では 3.0%（平年 0.7%）、中遠地域では 4.4%（平年 1.6%）と、中部及び中遠地域での発生が多かった。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

#### 防除対策

- ・ 発病株から周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し発病株や、発病が疑われる株の早期発見に努める。発病株は培土ごと除き、ビニール袋に入れてほ場外へ出し、殺菌処理後に残さを処分する。
- ・ 本病原菌は水滴の飛散等によって伝染する。薬剤散布も伝染を助長する可能性があるため、殺虫剤のみの散布、感受性低下の疑われる剤（MBC 殺菌剤（FRAC: 1）、DMI 殺菌剤（FRAC: 3）、Qoi 殺菌剤（FRAC: 11））の散布は避ける。
- ・ 発生状況及び防除対策については、[「技術情報第5号（いちご 炭疽病）」](#)も参照する。

### ●アブラムシ類

#### 予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は 2.9%（平年 4.7%）と平年より少なかったが、一部ほ場では多発していた。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

#### 防除対策

- ・ ほ場をよく観察し、初期防除に努める。
- ・ 天敵製剤を利用するほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

## ●ハダニ類

### 予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は14.2%（平年16.0%）と平年よりやや少なかったが、一部ほ場では多発していた。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

### 防除対策

- ・寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、天敵や気門封鎖剤を利用する。なお、気門封鎖剤は卵への効果が低く残効性が期待できないため、5日間隔程度で連続散布する。
- ・天敵製剤を利用する場合は、ハダニ類及び天敵の発生状況をよく観察する。ハダニ類の発生が多い場合には、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

## ●アザミウマ類

### 予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は5.6%（平年2.0%）と平年より発生が多かった。
- ・地域別の寄生株率は、東部地域で発生なし（平年0.3%）、中部地域で7.4%（平年4.1%）、中遠地域で9.4%（平年1.5%）と、中部及び中遠地域での発生が多かった。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。ただし、本年は11月までの気温が平年より高く推移しており、施設内への本虫の侵入が助長されている。今後、既に施設内に侵入した個体が増殖し、果実被害の発生が予想されるため注意する。

### 防除対策

- ・本虫は花を好んで寄生する。花における発生状況をよく観察し、本虫の寄生が認められた場合は少発生のうちに防除する。また、必要のない花は摘み取る。
- ・施設内外の雑草や花き類は、本虫の発生源となるため除去する。
- ・天敵製剤を利用するほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。
- ・発生状況及び防除対策については、[「技術情報第6号（いちご アザミウマ類）」](#)も参照する。

## ●ハスモンヨトウ

### 予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.7%（平年0.3%）と平年より多かった。また、被害株率は8.9%（平年値なし、昨年9.0%）であった。
- ・フェロモントラップ調査における10月21日～11月20日の合計誘殺数は、3地点（静岡市、磐田市および御前崎市）すべてで平年より多く推移している。
- ・病害虫防除員からの報告によると、6名全員が本種の発生を「やや多い」または「多い」と回答した。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

### 防除対策

- ・気温の低下に伴い施設内への成虫の侵入は少なくなるが、発生を認めた場合は若齢幼虫のうちに防除する。
- ・発生状況及び防除対策については、[「技術情報第3号（作物全般 ハスモンヨトウ）」](#)も参照する。

### 3 季節予報

#### ● 1か月予報 (東海地方 令和6年11月21日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 11月23日から12月22日

#### 【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月	天候	平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
1週目	気温	1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

#### 【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	30	30	40
1か月	降水量	40	30	30
1か月	日照時間	30	30	40
1週目	気温	20	40	40
2週目	気温	30	30	40
3～4週目	気温	30	40	30

#### 【予報の対象期間】

1か月 : 11月23日(土)～12月22日(日)  
1週目 : 11月23日(土)～11月29日(金)  
2週目 : 11月30日(土)～12月6日(金)  
3～4週目 : 12月7日(土)～12月20日(金)

#### ※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1

TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL <https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>